馬耳東風

卯月，桜前線が日本列島を北上し，その春爛漫の姿に日本人の感性がそこはかとなく刺激される季節である．寒さに耐え冬篭りしていた生き物達が生命活動を取り戻して活発に動き出す．いかにも待たれる季節である．それとともに，多くの人々にとって新しい出会いの季節と重なり一層の感性がゆさぶられる．「敷島の　大和心を人問はば　朝日に匂ふ　山桜花」と本居宣長が詠んだように朝日を受けて匂うように輝く桜は，富士山に代表される霊峰，清らかな湧水，昇り来る朝の太陽と同じように日本人の心の琴線に触れるのである．それはまさに日本人の持つ美意識の遺伝素質のように思えてならない．この感性は一体どのようにして育まれてきたのだろうか．日本民族は古くから自然と共存し共生し，その恵みに感謝と畏敬の念を抱きながら，幾世代にもわたって生き様をつなげてきた．世界の古代文明の多くは自然征服の思想が先行し人間の傲慢とも言える利己主義を表面化してきた．ところが日本人の価値観は，島国でしかも四季折々の現象を伴う国土の自然環境とともに生活の基盤を築き，「海の幸山の幸」に囲まれ限りない感謝を込めて生きてきた．そこには自ら自然への畏敬の念が生じ，まさに神の恵みとして受け止めたであろう．自然崇拝は自然発生的に水神（水天宮）や山神の存在となり，やがて祖先神や守護神となり仏教伝来とともに神仏習合の形態をとりながら多くの地域に勧請され，氏神や産土神として鎮められた．国・城・寺院・村落などを守護する鎮守として地域の崇敬の対象となった．鎮守はその自然崇拝のあり様から鎮まる森に囲まれていなければならない．森が無ければそこには神は住まないのである．「鎮守の森」は神の居場所として重要なのだ．昨今環境や生態の面からも特に重要視されている．境内林の代表格のいわゆる「ご神木」は多くの社寺で見かけるが，年数も定かでない巨大な風格充分な老木に神格を見出し，神社では注連縄を巻いて祈りの対象とする．樹齢は勿論のこと，幾星霜風雪や落雷に耐え痛めつけられた樹幹に手当ての跡が見受けられたりする．日本古来の杉・檜・欅や椎等地域によって樹相や境内の林相も様々である．

さて，東京の真ん中にある代々木の明治神宮は，鎮座九十年を迎えるという．明治の国造りは維新から世界を相手に未曾有の変革が行われ，それを象徴する人々の熱い思いが明治天皇と昭憲皇太后を祀る神宮創建となった．大正９年野放し状態の御料地が，植林により永遠の杜すなわち森厳なる神社林を造成するという遠大な構想のもと，当時の叡智の限りを尽くして造林されたという．国民の献木と勤労奉仕によって百年後の自然林を目指した杜は，九十年を経て生気溢れる森厳な祈りの杜として多くの参拝者を受け入れている．

地域の身近にあり，日本人の感性に響き感性を培う鎮守の森は，祈りと環境や生態の場として永久に守り伝えたいものだ．

（柏）